



深イ～話！

No.26

～石川県立小松瀬領養護学校教諭 山元加津子氏から～

きいちゃんという女の子は、手足が不自由でした。いつもうつむきがちの、どちらかというとき暗い感じのするお子さんでした。

そのきいちゃんが、ある日とてもうれしそうなお顔で、職員室に飛び込んできました。「お姉ちゃんが結婚するのよ、今度私、結婚式に出るのよ。」と。

ところが、1週間もしないころ、今度は教室で泣いている姿を見つけたのです。「きいちゃん、どうして泣いているの」と聞くと、「お母さんが、結婚式に出ないでっというの。私のことが恥ずかしいのよ。私なんか産まなきゃ良かったのに」とそう言って泣いているのです。

きいちゃんのお母さんは、お姉さんのことばかり可愛がるような方ではありません。どちらかというとき、かえってきいちゃんのことをいつも可愛がっておられて、目の中に入れても痛くないと思っておられるような方でした。

けれどももしかしたら、きいちゃんが結婚式に出ることで、例えば障害のある子が生まれるんじゃないかと思われたり、お姉さんが肩身の狭い思いをするんじゃないかというようなことをお母さんが考えられたのかなと、私は思ったりしていました。

きいちゃんに何と言ってあげていいかわかりませんでした。ただ、結婚式のプレゼントに浴衣を一緒に作ろうと提案したのです。

でも、きいちゃんは手が不自由なので、きつとうまく縫えないだろうなと思っていました。けれど、一針でも二針でもいいし、ミシンもあるし、私もお手伝いしてもいいからと思っていました。

最初は手に血豆をいっぱい作って、血をたくさん流しながら練習しました。

一所懸命にほとんど一人で仕上げたのです。

とても素敵な浴衣になったので、お姉さんのところに急いで送りました。

するとお姉さんから電話がかかってきて、きいちゃんだけでなく、私も結婚式に出てくださいと言うのです。

お母さんの気持ちを考えてどうしようかと思いましたが、お母さんに伺うと、「それがあの子の気持ちですから、出てやってください。」とおっしゃるので、出ることにしました。

お姉さんはとても綺麗で、幸せそうでした。でも、きいちゃんの姿を見て、何かひそひそ話をする方がおられるので、私はきいちゃんはどう思っているんだろう、来ないほうが良かったんだろうかと思っていました。

そんなときにお色直しから扉を開けて出てこられたお姉さんは、驚いたことに、きいちゃんが縫ったあの浴衣を着ていました。

一生に一度、あれも着たいこれも着たいと思う披露宴に、きいちゃんの浴衣を着てくださったのです。

そして、お姉さんは旦那さんとなられる方とマイクの前に立たれ、私ときいちゃんをそばに呼んで、次のようなお話をされたのです。

「この浴衣は私の妹が縫ってくれました。

私の妹は小さいときに高い熱が出て、手足が不自由です。でも、こんな素敵な浴衣を縫ってくれたんです。

妹は小さいときに病気になって、家族から離れて生活しなければなりませんでした。私のことを恨んでいるんじゃないかと思ったこともありました。

でもそうじゃなくて、私のためにこんなに素敵な浴衣を縫ってくれたんです。

私はこれから妹のことを、大切に誇りに思って生きていこうと思います。」

会場から大きな大きな拍手が沸きました。

きいちゃんもとても嬉しそうでした。

お姉さんは、それまで何もできない子という思いで、きちゃんを見ていたそうです。でもそうじゃないとわかったときに、きいちゃんはきいちゃんとして生まれて、きいちゃんとして生きてきた。

もしここで隠すようなことがあったら、きいちゃんの人生はどんなに淋しいものになるんだろう。この子はこれでいいんだ、それが素敵なんだということを皆さんの前で話されたのです。

きいちゃんはそのことがあってから、とても明るくなりました。

そして、「私は和裁を習いたい」と言って、和裁を一生の仕事に選んだのです。